◆検 査 室

室 長 中島晴伸

2018年度は9人体制で検査室運営を開始したが、8月末から育児休業明けで1名が復帰し、10名体制での運用となった。継続して検体検査と生理検査間でのローテーションを行う事により、全体でのカバーリング体制が更に充実した。それにより有給休暇等の取得しやすい環境となり、更に2018年度末契約職員1名の削減、および更に1名の技師を時短勤務へ変更する事が可能となった。

また、週1回の曜日限定ではあるが、11月から外来採血業務のフォローを開始した。

出前健康講座は「食中毒に気をつけましょう」と「閉塞性動脈硬化症とフットケア」、新たに「肝臓癌にならないために」のテーマで参加した。また看護師を中心としたミニレクチャーも、例年に加え「患者に安全な採血を目差して」を含む5つのテーマで開催した。

【検体検査】

細菌検査外注先の見直しを行い（ＳＲＬとＢＭＬとの競合）、結果的にＳＲＬへの外注費用が年間190万円程削減できた。今後は検体検査の外注費用を含めての検討を行いたい。

ＺＴＴ・ＴＴＴの検査廃止、尿沈渣結果の表記方法の変更やｎｏｎ-ＨＤＬの採用など、検査界の流れに応じた対応を行った。

2018年度の検査件数は、外来入院共に微増であった。

【生理検査】

ここ数年来実施してきた超音波研修の成果により、心エコーは4名体制（担当者1名退職後も）、腹部エコーは3名体制（現2名研修継続中）となった。さらに他の領域も充実した体制を構築していく。

前年度導入したＡｐｌｉｏ500にて測定可能な「肝硬度測定」が、10月から保険収載され（200点/3ヶ月に1回）算定可能となった。病名として「肝硬変・肝硬変疑い含む」が必要であるが、臨床的にも収入的にも有用である。

近隣医療施設からの依頼検査は、受諾可能なシステムは構築できたが、他院からの要望が少なく、検査数の増加へは繋がらなかった。

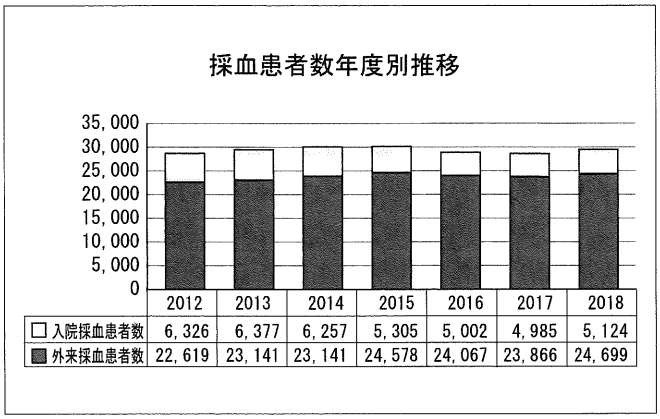
2018年度の検査件数は、全体で500件ほど増加した。

検査室全体としては前年度比500万円程の増収が見込まれる。

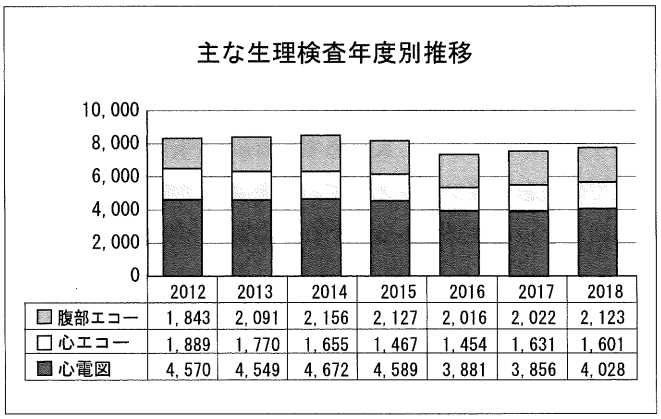
【今後の展望】

検査室全体のカバーリング体制のさらなる充実による、休みの取りやすい就業環境を整備していく。

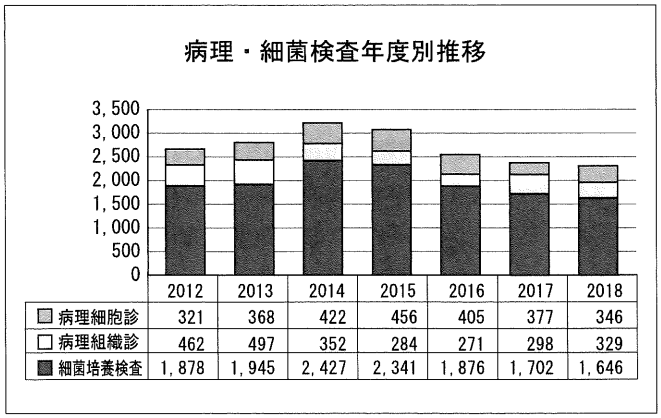
実務のマンパワーは充実してきているが、数年来「主任」が不在であり、マネージメント力の充実が急務である。



	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
入院採血患者数	6,326	6,377	6,257	5,305	5,002	4,985	5,124
外来採血患者数	22,619	23,141	23,141	24,578	24,067	23,866	24,699



	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
腹部エコー	1,843	2,091	2,156	2,127	2,016	2,022	2,123
心エコー	1,889	1,770	1,655	1,467	1,454	1,631	1,601
心電図	4,570	4,549	4,672	4,589	3,881	3,856	4,028



	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
病理細胞診	321	368	422	456	405	377	346
病理組織診	462	497	352	284	271	298	329
細菌培養検査	1,878	1,945	2,427	2,341	1,876	1,702	1,646